外　国　語　科

# 生徒一人一人の学習状況を的確に把握する評価方法の研究Ⅰ

## ～「話すこと」「書くこと」の学習指導の工夫を通して～

附属函館中学校　　宮　野　　健，福　留　志　織

### Ⅰ　はじめに

平成２４年度から，中学校においては，生徒に基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り，自ら学び自ら考えるなどの子どもたちの「生きる力」をよりいっそうはぐくむことをねらいとした新しい学習指導要領が全面実施される。周知の通り，新しい学習指導要領は，子どもたちの現状をふまえ，「生きる力」をはぐくむという理念のもと，知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視している。また，言語や理数の力などをはぐくむための教育内容を充実させ，授業時数も増加させている。

このような中で，中学校外国語科としての大きな変更点は，年間授業時数の実質１０％の増加，聞く・話す・読む・書く技能を総合的に充実（語数を増加〔900 語程度まで→1200 語程度〕，教材の題材を充実）などが挙げられる。その中でも，授業時数の増加については，３年間を見通したより明確なビジョンをもって計画的に指導に当たることを大きな課題として私たちに与えられたと考えてもよい。本校でも，新しい教育課程のもとで，英語の時数を本年度から全学年週４時間で実施しているが，私たちは「何を教えたいのか，何を学ばせたいのか」を常に念頭に置いておく必要がある。

また，今回の学習指導要領の改訂に伴い，学習評価の基本的な在り方について，新しい学習指導要領の基本的な考え方を踏まえた「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」が，平成２２年３月，中央教育審議会においてとりまとめられた。そこでは，①きめ細かい指導の充実や児童生徒一人一人の学習の定着を図るため，目標に準拠した評価による観点別学習状況の評価や評定を着実に実施すること，②学習評価においても，学力の重要な要素を示した新しい学習指導要領の趣旨を反映すること，③学校や設置者の創意工夫を生かす現場主義を重視した学習評価を推進すること，の三つの基本的な考え方に沿って学習評価を行うことが適切であると示されている。特に学校教育法の改正における学力の規定を受けることと，目標準拠評価の定着を通して指導と評価の一体化を一層進めることの重要性が述べられている。[1)]

これらのことを踏まえ，本科では，指導計画に沿って授業を実践していく中で，評価規準の見直しやパフォーマンス評価を視野に入れた評価方法等の工夫に取り組むことによって，新しい学習指導要領に定められた外国語科の目標等の実現状況をより適切に把握することができると考え，研究を進めることにした。

### Ⅱ　研究の経過

本科では，国立教育政策研究所からの指定を受け，「新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究（外国語）」というテーマのもと，平成２１・２２年度教育課程研究指定校事業を実施し，「コミュニケーション能力の素地を踏まえた中学校での学習指導の工夫　―第１学年における年間指導

計画の作成と教材開発を通して―」という研究主題を設定し研究を進めてきた。

これと並行して，昨年度の教科研究では，「表現力向上のための指導の工夫」という副主題の下，文法指導と言語活動を一体的に行うよう改善を図り，知り得た知識を活用し，発信する力を身につけさせるための授業作りに取り組んだ。昨年度英語の授業時数を週３．５時間に変更して新たに生み出された１８時間を生かしながら，スピーチ活動等を取り入れることで，話すこと・書くことの両面において少しずつ変化が見られるようになった。成果としては，文法的な細かなミスはあるものの，積極的に自分の経験や考えを話したり書いたりするなど，主に表現の能力において向上がみられたことが挙げられる。しかし，その１８時間分を計画的に指導計画に取り入れることができなかったため，本年度から先行して編成・実施している新教育課程の実施に向けて課題が残った。

## Ⅲ　本年度の研究

本校は，国立教育政策研究所からの指定を受け，平成２３・２４年度に「学習評価に関する研究指定校事業」として，「学習指導要領に定められた目標等の実現状況を把握するための評価方法についての研究開発」を研究主題として研究を進めている。

本校英語科の実態として，平成２２年度に行われたＴＫ式観点別到達度学力検査の結果から，観点別評価では「表現の能力」が他の観点に比べて正答率が低いことがわかった。また，この観点の評価については，評価規準が不明確であったり，評価方法が適切でなかったりするなど，必ずしも，妥当性・信頼性の高い評価が実施できているとは言えない。そこで，課題となっている表現の能力の「話すこと」「書くこと」の学習指導を工夫し，その指導と一体となる評価方法を研究することにより，生徒一人一人の学習状況を的確に把握することができるとともに，その後の学習指導の改善，充実につながっていくと考え，本研究主題と教科研究仮説を設定した。

教科研究仮説
・「話すこと」「書くこと」の学習指導を工夫し，その指導と一体となる評価方法を研究することにより，生徒一人一人の学習状況を的確に把握することができる。

### １．　「発表活動」に着目した指導

新しい学習指導要領においては，自らの考えを相手に伝えるための「発信力」やコミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力，内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力などの育成が重視されている。これらの観点から，聞くことや読むことを通じて獲得した知識等について，自らの体験や考えなどと結び付けながら活用し，話すことや書くことを通じて発信することが可能となるよう，４技能を総合的に育成する指導を充実することが求められている。

そこで，まず各学年の年間指導計画の見直しを行い，授業時数の増加を生かして「発表活動」を指導計画に組み込むことにした。これは，話すことや書くことが中心の発信型の活動で，表１の内容について各学年で主に単元末に取り組ませる。そのため，単元の最初の方で，単元末までにどのような課題に取り組むことになるのか見通しを与えておくことが必要になる。なお，第１学年の発表活動については，先述の平成２１・２２年度教育課程研究指定校事業において取り組んだ内容の一つであり，すでに年間指導計画に組み込まれている。[2)]

表２は第３学年の年間指導計画，表３は同じく第３学年の年間評価計画の一部抜粋である。例えば，第３

学年のUnit2では，主に現在完了形について学習した後，単元のまとめとして「ストーリーテリング」を発表学習として行う。これは，Unit２全体のストーリーがわかるように，簡単な絵を見せながら，それぞれの絵について英文で紹介するものである。第３者が語るようにストーリーを話すことが求められるので，教科書本文をそのまま扱うことはできず，前もって「どのようにストーリーを組み立てるかを考え，どんな絵をいくつ用いるかを判断し，どんな英文を用いて表現するか」が求められる。

表１　各学年の「発表活動」の概要

| | |
|---|---|
| １年 | 自己紹介（１学期），友だち紹介（２学期），家族紹介・ストーリーコンテスト（３学期） |
| ２年 | スピーチ・プロジェクト（４～５月） |
| | ミニディベート・プロジェクト（６～１０月） |
| ３年 | ストーリーテリング・プロジェクト（４～１０月） |
| | ディスカッション・プロジェクト（１１月） |

| 月 | 単元・題材 | 指導目標 | 学習内容 | 時数 | 言語活動系統表との関連 | 指導上の留意点 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | Unit 2<br>A Fireworks Festival | ・「ずっと～している」と、現在まで続いていることを言ったり、「ずっと～しているか」と尋ねたりする言い方を理解し、表現できるようにする。 | ・「誰が、どのくらいの期間何をしているのか」についてインタビューし、わかったことを現在完了形（継続）を用いて表現する。 | １６ | 【感受・表現】<br>【収集・整理】<br>【記録・伝達】 | ・場面設定に配慮した導入と運用練習にしたい。 |
| | | ・実況中継の英文を読んで内容を理解し、また、「ずっと～にいます」と現在まで続いていることを言う言い方を理解し、表現できるようにする。 | ・「誰が、どのくらいの期間どこにいるのか」についてインタビューし、わかったことを現在完了形を用いて表現する。 | | | |
| | | ・レポーターによる参加者や花火師へのインタビューを読んで内容を理解し、それをもとにしてインタビューを演じることができるようにする。 | ・レポーターのインタビュー内容を創作し、インタビュー形式に変えて、ペアでレポーターと来場者とのインタビューを演じる。 | | | ・アイコンタクトやジェスチャーにも気をつけさせたい。 |
| | | ・テレビの実況中継を聞いて、具体的な内容や大切な部分を聞き取り、質問に答えることができるようにする。 | ・テレビレポーターによる、コンサート会場前からの実況中継やインタビューを聞き取り、その内容についてタスクの解決を図る。 | | | ・ステップに従い、タスクの解決に努めさせる。 |
| | 発表学習（Unit2） | ・ 単元のまとめとして、簡単に描写した絵を用いたストーリーテリングに取り組ませる。また、その内容についてQ&Aができるようにする。 | ・単元の内容について、簡単にストーリーを再現する。また、友だちや先生からの質問に答える。 | | | ・教師によるパフォーマンス評価では、ビデオ撮影を行い、フィードバックする。 |
| 6 | Writing Plus 1 | ・保護者を対象にした修学旅行報告会の案内を書くことができるようにする。 | ・保護者向けの修学旅行報告会の案内文を書くことができる。 | | | ・日時や内容等について場面設定を工夫する。 |
| | Unit 3<br>Fair Trade Chocolate | ・「～したことがありますか」と経験を尋ねたり、それに答えたりする言い方を理解し、表現できるようにする。 | ・どのような経験をしたことがあるか、経験を尋ねるインタビューを行い、わかったことを現在完了形（経験）を用いて表現する。 | ３８ | 【感受・表現】<br>【収集・整理】<br>【記録・伝達】 | ・場面設定に配慮した導入と運用練習にしたい。 |
| | | ・「ちょうど～したところです」と言ったり、「もう～しましたか」と尋ねたりする言い方を理解し、表現できるようにする。 | ・今日の時間割や、今日しなければならないことなどを、例にならって現在完了形（完了）を用いて表現する。 | | | |
| | | ・パンフレットを読んで内容を理解し、それについての感想を述べることができるようにする。 | ・先生や友達のことについて、I didn't know / I think 等の書き出しに続けて感想を述べる。 | | | |
| | | ・手紙を読んで内容を理解し、手紙を書いた人への返事を書くことができる。<br>・不定詞の原因を表す副詞的用法の形・意味・用法を理解し、表現できるようにする。 | ・リータが書いた手紙の内容を理解し、ティムへの返事として英文の手紙を書く。<br>・いろいろな出来事を想定して、不定詞を用いて表現する。 | | | |
| 7 | | ・２人の対話や説明を聞いて、グラフや地図を見ながら、大切なポイントを把握させる。 | ・英語での社会（地理）の授業の様子を聞き、ポイントをまとめる。 | | | ・ステップに従い、タスクの解決に努めさせる。 |
| | 発表学習（Unit3） | ・ 単元のまとめとして、簡単に描写した絵を用いたストーリーテリングに取り組ませる。また、その内容についてQ&Aができるようにする。 | ・単元の内容について、簡単にストーリーを再現する。また、友だちや先生からの質問に答える。 | | | ・教師によるパフォーマンス評価では、ビデオ撮影を行い、フィードバックする。 |
| 8 | | ・基本表現を用いて、相手を誘ったり、提案することができるようにする。 | ・本文のモデルを参考にして、時間や場所などを変えながらロールプレイングする。 | | | |
| | | ・物語を読んで、場面の変化や登場人物の心情などを読みとることができるようにする。 | ・物語の背景となる歴史的事実を知り、戦争と平和について考える。 | | | ・精読から暗唱へと発展させていきたい。 |

年間評価計画表第３学年

| 月 | 単元・題材 | 学習項目 | 指導内容 | 評価方法・場面等 | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | Orientation | 発音クリニック | 発音指導 | 観察 | ○ | | ○ | |
| | Warm-up | Show&Tell　Jigsaw Reading | スピーチと英語のゲーム | ワークシート | | ◎ | | |
| | Multi Plus 2 | 修学旅行記 | 英文日記の書き方 | ワークシート | ◎ | ○ | | |
| | Unit1 | 受動態の表現 | 受け身の文とその疑問文及び応答文、否定文 | 単元テスト | | | | ○ |
| | | SVOC（C=形容詞） | make（人）（形容詞） | 単元テスト | | | | ○ |
| 月 | | 発表学習 | story-telling | パフォーマンス | ○ | ◎ | | |
| 5 | Unit2 | 現在完了形（継続用法）の表現 | 現在完了の平叙文、疑問文及び応答文、否定文 | 期末テスト | | | ○ | ○ |
| 月 | | 発表学習 | story-telling | パフォーマンス | ○ | ◎ | | |
| 6 | Writing Plus 1 | 修学旅行報告会の案内状作成 | 案内文の書き方 | ワークシート | ○ | ○ | | |
| 月 | Unit3 | 現在完了形（経験・完了用法）の表現 | 現在完了の平叙文、疑問文及び応答文、否定文 | 期末テスト | | | ○ | ○ |
| 7 | | 不定詞を用いた言い方 | 不定詞の副詞的用法 | 期末テスト | | | | ○ |
| | | 発表学習 | story-telling | パフォーマンス | ○ | ◎ | | |
| 月 | Speaking Plus 1 | 提案や人を誘う表現 | 丁寧にさそう言い方 | 観察 | ○ | | | |

## ２．　評価方法の工夫

今回の指導要録改訂のポイントは，評価の簡略化，効率化であり，「評価規準の作成のための参考資料」「評価方法等の工夫改善のための参考資料」もこの方向で作成されている。これらの資料では，ある単元（題材）において，あまりにも多くの評価規準を設定したり，多くの評価方法を組み合わせたりすることは，多大な負担となることが明示されている。そのため，どのような観点の評価を指導過程の中で行うのが適切かを示すために，「指導と評価の計画の概要」として，一つの単元の中で，各観点の評価をいつ行うかが例示されている。ポイントは，一時間では特定の観点に絞って評価するように示しているところである。また，どのような評価方法を組み合わせるかも例示されている。[3)]

本科では，話すことの評価について，多くの知識を短時間で評価できるペーパーテストでは正しくかつ適切に評価することは難しく，授業中の観察だけでは生徒一人一人の学習状況をとらえるだけでも精一杯で時間的に余裕がない状況だった。だからといって，平成１９年に公表された『特定の課題に関する調査（英語：「話すこと」（中学校））のような「コンピュータを用いた実技調査及び質問紙調査」方式では，準備等に膨大な時間がかかってしまい効率がよいとは言えない。

しかし，授業時数の増加を生かし評価方法を工夫することによって，これまで見とりにくかった主に話すことの評価について，パフォーマンス課題を与えて一人一人の実現状況を見とるパフォーマンス評価を積極的に導入することにした。そして，聞くこと・読むこと・書くことについては，これまで通りペーパーテストやワークシート及び観察による評価を継続することにした。

前項のストーリーテリングを例にあげる。はじめは４人１組のグループワークの形式をとり，最終的には教師と生徒の１対１の形式でパフォーマンス課題に取り組ませる。グループワークでは，１人がストーリーテラー，２人が質問者，残り１人が評価者として役割を分担し順に交代する。あらかじめ，表４のような自己評価ができるように判断基準（生徒の具体的パフォーマンスのイメージ）を示しておく。また，友だちによる評価も参考にするために表５のような個人票を使用することも伝えておく。

友だち同士による活動に慣れた後で，同じ方法で対教師と行うときは，その様子をビデオ撮影し録画しておく。そして，ビデオ映像の他に，ポートフォリオ形式でファイルされたストーリー原稿をもとに教師が評価を行う。自己評価と個人票は参考資料とする。また，生徒への動機づけとともに，自己評価能力を高めるためにも，一人一人のビデオ映像を視聴することによって，自己のパフォーマンスを振り返り，他者のパフォーマンスを参考にさせるようにする。

## Ⅳ　研究仮説に基づく実践例（第２学年）

### １．題材名

Unit3　　E-pals in Asia　　Reading for Communication　　メールで返事を出そう

### ２．実践の概要

本実践では，生徒の身近で親しみやすい出来事について取り上げ，その内容に関する意見や記事に対して，初歩的なディベートや，ディスカッションで必要とされる表現法を用い，自分の体験等を結びつけながら意見を構築させた。また，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るべく，さらに仲間にその内容を表明する活動をした。

評価については，その内容の一貫性や文法的正確さについて相互に評価をさせたり，ＡＬＴからの評価を受けさせたりなどした。また，オンデマンド教材としてＷｅｂ上に課題の習熟度別の回答例を到達目標として生徒に示すことにより，学習意欲を向上させ自律的に学習する態度の育成を目指した。

### ３．指導計画（６時間扱い）

| 学習内容 | 主な指導目標 | 時間 | 評価の観点 | | | | 主な評価方法 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 関 | 表 | 理 | 知 | |
| Reading for Communication<br>・不定詞の活用 | ・他生徒に自己の意見が理解してもらえるよう構成し，発表することができる。 | 2<br>（本時<br>1／2） | ○ | ◎ | | ○ | ・ワークシート<br>・観察 |
| | ・他の生徒との意見の違いを理解し，それに対する反対意見を，用語を用い構築する。 | | ○ | ◎ | ◎ | ○ | |

### ４．本時案（１／２）

| 学習活動 | 教師の働きかけ | 指導上の留意点 |
|---|---|---|
| ○ウォームアップ<br>・前時の復習<br>Vocabulary check を行う<br><br>○本時の学習目標を確認する | ○帯学習の Q&A を行う<br>既習知識を用い自分の意見を短い文で発表させる<br>・前時の復習<br>前時に意見記事と自己の意見内容の確認（相手に意図が伝わるよう表現法の工夫の確認） | ○英語でコミュニケーションを図りやすい雰囲気作りに心がける<br>○前時の意見交流での良かった点，改善点を振り返らせる |
| 資料をもとに人に伝わるよう，自分の意見を構築しよう | | |
| ○活動１<br>賛成派・反対派に分かれペアとなり，用語を用いながらそれぞれの立場からの意見を再構築する<br>○活動２<br>画用紙に意見を書き全体に発表する<br>○次時の学習内容を確認する | ○意見を構築していく際，評価者が見とる観点を確認させ，意識させる<br>・文章の一貫性<br>・文法の正確さ<br>・用語が効果的に使用されているか<br>○ALT よりもたらされる自分の熟達度に関する情報を認識させ，課題意識をもたせる<br>○提示した観点についての達成度を認識させる | ○評価の観点到達を目指して生徒が作業を進めるよう支援する<br><br>○ALT による評価（熟達度）<br>○相互評価・自己評価（到達度）<br>○自分の熟達度・到達度に関するフィードバックをもとに，次回の到達目標を考え目指すよう指導する |
| 自分と反対の立場の意見に対し，それを覆すための意見を書く | | |

## ５．本時案（２／２）

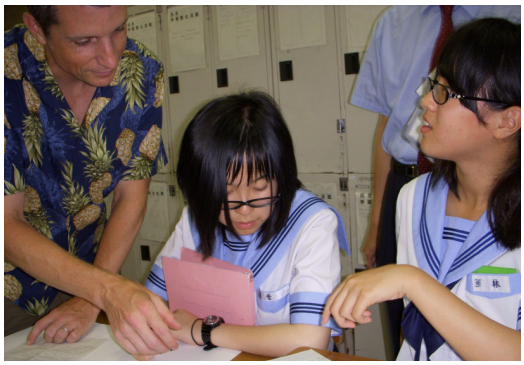
| 学習活動 | 教師の働きかけ | 指導上の留意点 |
|---|---|---|
| ○Warm-up<br>・前時の復習<br>Vocabulary check を行う<br>○本時の学習目標を確認する | ○帯学習の QA を行う<br>既習知識を用い自分の意見を短い文で発表させる<br>・前時の復習<br>前時に意見記事と事故の意見内容の確認（相手に意図が伝わるよう表現法の工夫の確認） | ○英語でコミュニケーションを図りやすい雰囲気づくりに心がける<br>○前時の意見交流での良かった点・改善点を振り返らせる |
| 自分と反対の立場の意見に対し，それを覆すための意見を書く | | |
| ○活動１　前時，用語を用いながら再構築した自分の意見とは反対の意見が書かれた画用紙を一つ選び，新たに導入された反論を書く<br>・I see your point, but<br>・Yes, but<br>・I have a question about　など<br>○活動２　ワークシートに意見を書き全体に発表する | ○新たに指導する語<br>・I see your point, but<br>・Yes, but<br>・I have a question about など<br>○意見を構築していく際，評価者がみとる観点を確認させ，意識させる<br>・文章の一貫性<br>・文法の正確さ<br>・用語が効果的に使用されているか | ○評価の観点到達を目指して生徒が，作業を進めるよう支援する |
| ○次時の学習内容を確認する | ○ＡＬＴよりもたらせる自分の熟達度に関する情報を認識させ，課題意識をもたせる<br>○提示した観点についての達成度を認識させる<br>○次時の学習内容を伝える | ○ＡＬＴによる評価（熟達度）<br>○相互評価・自己評価（到達度）<br>○生徒個々が自分の熟達度・到達度に関するフィードバックをもとに，次回の到達目標を考え，目指すよう指導する |

## Ⅴ　仮説の検証

これまで，「表現の能力」のうち特に「話すこと」の評価については，過去の先行研究のように観察法や面談法で評価することが多かった。これらは，テスト形式として「音読テスト」「インタビューテスト」「スピーキングテスト」のように，教科書本文の音読や，あるテーマ（昨日のことなど）についてのＱ＆Ａ，Show&Tell のようなスピーチの様子を，観察したり一人一人面談して評価していた。

これらの観察法や面談法では，一人一人を見とる時間的な余裕がないわりに評価の観点を多く設定したり，評価の際，例えばＡ＝Excellent，Ｂ＝Good，Ｃ＝Poor の場合の Excellent はどの程度のイメージなのかについて曖昧さが残ったりするなど課題があった。過去の研究では，Fluency/Delivery/Content の３点を２段階で評価する事例，Loudness/Fluency/Attitude の３点を３段階で評価する事例，声の大きさ／アイコンタクト／わかりやすく伝えるという３点を３段階で評価する事例，English/Fluency を４段階で評価する事例，声／話す態度／暗唱度／内容の面白さを３段階で評価する事例などが見られるが，これらの観点を一人一人について評価するには時間的に余裕がないと難しいとされてきた。

しかし，授業時数増を生かして，「話すこと」「書くこと」中心の「発表活動」を計画的に組み込んだことと，パフォーマンス課題を取り入れた評価方法の工夫によって，これまでより一人一人の学習状況を把握できるようになった。また，パフォーマンス課題について段階的な判断基準を設定することで，ある程度生徒の姿を予想することができるようになった。さらに，音声や映像でパフォーマンスの状況を記録することでテストの結果を指導の改善に生かしたり，生徒へのフィーバックに生かしたりすることも可能になった。



パフォーマンス課題についてＡＬＴからアドバイスを受けている様子（２年生）

## Ⅵ　成果と課題（これまでの実践をふり返って）

パフォーマンス評価は，学習した知識や技能の「活用」を求めることにその中心的な目的や効果があるといわれている。[4] 本科において音声言語を用いて伝えあう対人コミュニケーション上の活用力の状況を測定するには，ペーパーテストで測れない生徒の表現力や手立ての有効性を見とることができたと考える。

また，具体的な行動目標や到達目標を指導前に生徒に理解させておくことは，発信力の育成には，この種の指導と評価が有効であることが分かった。それは，話す力や書く力を伸ばそうとする学習者が，今自分はどのレベルにいて上のレベルに上達するには何をすべきか，努力目標や自己評価目標を明確に理解するからである。

課題としては，パフォーマンス状況を正確にかつ適切に評価するためには段階的に見とるための判断基準が必要であるが，その評価指標について改善を図っていかなければならない。さらに，パフォーマンス評価の付加的な効果である，「生徒の学習に対するモチベーションを高めること」「知識や技能が長期にわたり保持されること」については，今後時間をかけて指導していく中で検証していかなければならないだろう。[5] この点については，学期や学年にわたる学習活動の記録をファイルにとじておき，ある時点でそれを振り返りながら評価を行うような，ポートフォリオの作成による学習活動の足跡を取り入れた解釈にも取り組んでいきたい。

そして，これらの評価をどう評定へと導くか，「評定への総括」については学校全体としても取り組んで

いかなければならない課題であり，次年度以降研究を進めていきたい。

## Ⅶ　おわりに

学習評価については，具体的な評価規準の設定や評価方法などを研究・研修し，個々の教師が評価力を向上させ，根拠のある妥当性の高い評価・評定をして，保護者の信頼を得ることが求められている。本年度の研究では，本校研究仮説に沿い，パフォーマンス評価に着目した実践を進めているが，パフォーマンス評価が注目されるのは，ペーパーテストに比べてその妥当性が高いことによるのであり，妥当性がその評価を実施する意義はなくなってしまう。新しい学習指導要領が全面実施されるまで残された時間はわずかであるが，確かな学力の定着を目指して指導の改善を図るとともに，評価・評定の客観性や信頼性を担保するための方法の研究・開発等の推進に励んでいきたい。

（文責　　宮　野　　健）

＜引用文献＞

１）文部科学省（平成 22 年 5 月 11 日）「小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」
２）北海道教育大学附属函館中学校（2010）『教育研究大会研究紀要』　115～116 頁
３）国立教育政策研究所（2011）「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料」
４）指導と評価　第 665 号（平成 22 年）図書文化　41 頁
５）同上

＜参考文献＞

・北尾倫彦『授業改革と学力評価』（2008）図書文化
・橋本重治（原著）『教育評価法概説』（2003）図書文化
・杉本義美『指導と評価の一体化を目指す英語授業の創造』（2010）東京書籍
・小島宏／岩谷俊行（編著）『新しい学習評価のポイントと実践　１生きる力と新しい学習評価』（2010）ぎょうせい
・小島宏／岩谷俊行（編著）『新しい学習評価のポイントと実践　２各教科等の新しい学習評価の展開』（2010）ぎょうせい
・小島宏／岩谷俊行（編著）『新しい学習評価のポイントと実践　３学習評価を充実させる工夫改善』（2010）ぎょうせい
・松下佳代『パフォーマンス評価』（2007）日本標準
・三藤あさみ・西岡加名恵『パフォーマンス評価にどう取り組むか』（2010）日本標準
・田中耕治『新しい「評価のあり方」を拓く』（2010）日本標準
・国立教育政策研究所（2007）「特定の課題に関する調査（英語：「話すこと」（中学校））
・北海道教育庁生涯学習部小中・特殊教育課（2006）「平成１５年度中学校教育課程改善の手引　評価の充実について」